

2025年度 教育学研究科 博士課程指導教員一覧【前期課程・後期課程】

(五十音順)

泉 恵美子 教授	前期・後期課程
専門は英語教育学。主な研究領域は、コミュニケーション、カリキュラム・授業研究、小学校英語、評価。特に、コミュニケーションにおける挫折と修復、ストラテジーをテーマとして、スピーキングの指導と評価の研究を行っている。また、教師自律を目指し、内省／探求的手法を取り入れた授業研究に取り組んでいる。更に、小学校英語におけるリテラシー指導や、学習者の自己効力と自律、思考力・判断力・表現力等を促進する授業設計と評価の在り方について研究している。	
今津屋 直子 教授	前期・後期課程
専門は食物学、家庭科教育。食べもの、食べ方を通して人間性を育む食育を中心に、幼児期・学童期の子どものたちの生活の自立へ向けての支援や環境について家庭科教育の立場からも研究を展開している。	
岩坂 二規 准教授	前期課程
地球市民を育む教育としてのグローバル教育について、開発、人権、平和、環境といったグローバル・イシューの鍵概念をもとに学際的に研究している。また、その前提となる批判教育的な視点から、シティズンシップ教育やユースワークなどの広い意味での教育の可能性を模索している。	
岡本 哲雄 教授	前期・後期課程
現代を意味喪失の時代と受けとめ、「人間と教育」再発見のために、私たちが互いに形成し合う働きを「存在の謎」や「生きる意味」の次元に引き寄せて考えている。研究領域は、教育哲学、人間形成論。とりわけ、V.E. フランクルの臨床哲学を柱に、子どもの人間学や解釈学的方法、東西の宗教思想を手掛かりに研究している。	
梶原 直美 教授	前期課程
専門領域は、古代キリスト教思想史および死生観の研究である。霊性の表現である祈りの研究とともに、人間の生き方、宗教と倫理の関係を主たる研究内容としている。すなわち、不完全で弱さを持つ人間が、生きるプロセスにおける体験からいかに学び、それをいかなる生き方に繋げ得るのかをキリスト教の視点から、根底にある宗教性あるいは精神性との関連において探究している。	
金田 茂裕 教授	前期・後期課程
教育認知心理学・発達心理学の観点から教授（教えること）と学習（学ぶこと）に関して理論的・実証的に研究している。また、数の知識の形成過程に関心を持ち、調査・実験、関連資料（国内外の教科書など）の検討を行っている。	
栗山 誠 教授	前期・後期課程
美術教育と乳幼児期の造形的表現について研究を行う。特に子どものモノ環境に関わる活動（造形活動）の過程に注目し、意味の発生と展開、身体性、自己変容などの観点から、子どもにとってのリアリティ（＝面白さ）について研究を行う。その他、発達に沿った造形素材の研究と教材開発、創造的な環境や居場所について実践的に探究をしている。	

齋木 喜美子 教授	前期・後期課程
ライフワークとして取り組んでいるテーマは「近代以降沖縄の児童文化・児童文学史研究」で、専門分野は児童文化・文学と絵本研究である。研究方法は歴史研究を主軸としているため、可能な限り原典にあたり、自身の眼で確認しながら研究に取り組むことが大切だと考えている。また、作品が誕生した背景、作品の受容史と展開過程を探るだけでなく、子どもたちに読み継がれてきた作品の魅力は何なのか、作品分析を行っている。	
佐藤 真 教授	前期・後期課程
専門は、教育方法学。総合・探究学習等の子供に寄り添いながらの教育課程の開発、ティーム・ティーチング等による教授組織の改善等による教育方法の改革、ポートフォリオ・ルーブリック・モデレーション・パフォーマンス評価等の質的な教育評価の研究をしている。	
眞城 知己 教授	前期・後期課程
20 年以上にわたリイギリスとデンマークの障害のある子どもに関わる外国教育制度の特質に関する研究を続けながら、特別な教育的ニーズ概念とインクルーシヴ教育の新しい理論モデルの開発研究を行っている。	
菅原 伸康 教授	前期課程
専門は障害児教育。具体的な研究内容は、以下の4点である。 ①障害のある子どもの「ことば・文字・数」の学習教材・教育支援機器の開発と製作 ②上記の自作教材・支援機器を使用し、障害のある子どもへの教育支援 ③障害児者の家族成員の個と関係性のアイデンティティ様態に関する研究 ④支援ニーズのある高校生のセルフアドボカシースキル向上プログラムの開発	
高井 由起子 教授	前期課程
私の従来からの研究課題の一つとして、子ども虐待の問題がある。子どもへの虐待に関する問題については、育児ノイローゼや子育て環境の悪化等による虐待行為の予防（広い意味での子育て支援）、子どもに虐待行為を働いてしまう加害者への対応、虐待被害を受けた子どもへのケアのあり方等、様々な角度からの考察が必要であると考え。また、児童虐待防止法にも明記されている通り、子ども虐待とドメスティックバイオレンスは非常に密接に関連している。この意味でもドメスティックバイオレンス（デート DV も含む）の問題についても研究課題として追求している。	
富江 英俊 教授	前期課程
道徳教育においては「集団や社会への帰属意識」について、教育社会学においては「教育格差（特に地域格差）」や「教師の社会学」について関心を持っている。また、「機会均等」「民主主義」「学校・家庭・地域の連携」などの概念は「良きもの」とされることが多いが、突き詰めると曖昧な概念であり、これらの概念に潜むイデオロギーや価値についても考察している。	
中尾 正広 教授	前期・後期課程
専門は、トポロジーと算数・数学教育。教材研究の立場から、特に幾何学的領域に興味を持っている。教科教育法の一分野としての算数科教育法における教材開発を主要な研究課題としている。	
長島 礼 准教授	前期課程
専門は音楽科教育。小学校音楽科の授業改善を図るため、カリキュラムや教育内容、授業研究と評価、そして、特に指導者の指導力向上などにまつわる内容を研究している。また、音楽は耳だけでなく身体感覚を通して聴くもの（理解するもの）という前提に基づき、音楽性の発達と身体表現活動を研究の軸に据えている。	

橋本 真紀 教授	前期・後期課程
専門は、子ども家庭福祉学、子ども家庭支援論。子育て家庭への支援についてソーシャルワーク、保育の観点から研究を行っている。主たる研究テーマは、乳幼児とその家庭への個別支援、子育て家庭をとりまく地域資源の発掘から協働、子育て文化の醸成に至る包括的な専門的機能（地域を基盤とした子育て支援）、保育所における保育の専門性に基づく保護者支援（保育相談支援技術）である。	
橋本 祐子 教授	前期・後期課程
専門は、発達心理学と幼児教育。乳幼児期を中心に知的発達および道徳性の発達を研究テーマとしている。現在のプロジェクトは、幼児期から児童期にかけて報酬および責任の分配における公平観が発達するプロセスを解明することである。また、ピアジェの構成論を理論的基盤とし、遊びや生活場面における乳幼児の知的発達、乳幼児期からの知的・道徳的自律性を育む教育・保育実践の内容と方法について研究している。	
濱元 伸彦 准教授	前期課程
専門は、教育社会学および人権教育である。教育社会学においては、さまざまな教育上の不利を抱える子どもたちの社会的包摂をめざした学校の組織体制や教育実践のあり方を、主にフィールド調査に基づき検討している。他方で、学校における人権教育やインクルーシブ教育の方法、学校と地域社会の協働についても実践上の関心をもっており、学校現場の支援にあたりながら研究している。	
原田 大介 教授	前期・後期課程
専門は、国語科教育、授業研究、インクルーシブ教育である。小・中学校を中心に、通常の学級に在籍する児童・生徒の「ことばの学び」の研究をすすめている。教育制度や学力の問題、国語の授業のつくり方まで、幅広く研究している。	
藤井 恭子 教授	前期・後期課程
思春期・青年期から成人期までの友人関係を対象としてヤマアラシ・ジレンマの生涯発達や意義について実証研究を行っている。また共生教育の視点から、青年期の心理社会的危機をテーマとした対話型青年教育(D4A)の実践研究、教員養成におけるジェンダー葛藤についても研究している。	
藤木 大三 教授	前期課程
幼児・初等体育における、ボールゲームに関する総括的研究を行っている。幼児体育では、主にボールを用いた簡単な運動遊びと健全な心身の発育について、基礎的な知見構築に努めている。また初等体育では、ミニバスケットボール、Tボール、サッカー、フラッグフットボール等、既存のボールゲームの技術戦術、技能の習得方法や指導者の関わり方を中心に、特にアメリカの初等体育の現状と比較しながら、多面的な研究を行っている。	
渡邊 伸樹 教授	前期・後期課程
専門は数学教育学。算数・数学教育に関するカリキュラム・教育内容・教材の開発、現場教員の算数・数学の指導力向上を目指す授業研究(RTMaC授業研究)、的確な算数・数学の指導のできる教員の養成などの研究を実践的に行っている。	

以上